

曲目解説：小山裕幾

今日のコンサートは『現代美術と音楽が出会うとき』というテーマで、「現代音楽中心のプログラムを」との要望があった。フルートのレパートリーにおいて現代音楽は比較的重要な位置を占めるが、それだけだとメリハリがなくなる恐れがあると感じた。そこで、現代音楽を主軸としつつ、「前菜」あるいは「口直し」の意味も込めて、バロック音楽を取り入れた。

通常、フルートのコンサートはピアノと演奏することが多いが、今回はフルート・デュオということで、限られた曲のなかから特に旬のものを選んだ。あまり知られていない曲が多いかもしれないが、これを機に日本の演奏会でも取り上げられるようになれば幸いだ。なお、プログラムの順番を変更し、1曲追加したことをお詫びしたい。

最初にお聴きいただくのは、**ブラヴェの「前奏曲」**。非常に短い曲だが、バロックの基本が凝縮されており、場をあたためるのに最適であろう。

間髪入れずに、**イサン・ユンの「練習曲 第5番」**をお届けする。韓国の伝統楽器は日本の尺八や篠笛と似たような音がするが、本曲からもそのような音、メロディが聴こえてくるであろう。荒涼とした世界を堪能していただきたい。

次は、**テレマンの「12の幻想曲」より第7番**。フランス序曲の典型である2分の2拍子の序奏と3拍子の急楽章、そして序奏と同じような曲想で第1部が終わる（繰り返しを含めると、緩・急・緩・急・緩の流れ）。第2部には、短いロンド形式の踊りが登場する。

続いて、フィンランドの作曲家サーリアホの**「翼の簡潔さ」**。フィンランドは小学校から作曲の授業があり、ファーガルンド、リンドベリ、そしてサーリアホなど優秀な作曲家を多く輩出している。そんな彼女の作品は、フランス語の詩の朗読から始まる。フランスの詩人パースの「鳥」という詩集をフライブルクの図書館で読んだとき、鳥の重力への抵抗、飛翔、秘密、不死性などの着想を得たそう。現代奏法にメロディを上手く絡み合わせており、静かだが面白い作品に仕上がっている。

前半最後は、**チャーニーの「ドッペルゲンガー」**。譜面台を8本近く使用する作品で、2人の奏者が両端から演奏を開始する。演奏が進むに連れて、本体と影が1つになり、最終的にはどちらが影で本体なのかわからなくなる。シューベルトの歌曲「影法師」の1節が、曲の終わりに登場する。現代奏法を駆使した難曲である。

後半は、**オトテールの「2つの小品」**で始まる。冒頭のブラヴェのような序曲で始まり、3拍子の急楽章に至る。2曲目はロンド。後半を開始するのにちょうど良い軽めの曲だ。

続いて平井京子の**「二重奏曲～ふたりのために～」**。平井氏と私のつながりは10年以上前におよび、これまでに尺八、三味線、チェロ、フルートという編成の「眠れない満月の夜に」、フルート3本のための「青海波」、フルート・ソロのための「風つかい」、3本のフルートと声明のための慰霊の音楽など、多くの楽曲を作曲

していただいている。今回は「改訂版初演」ということになり、3楽章形式のこの曲にちりばめられた、日本人が忘れかけているようなメロディ、響きを堪能していただきたい。

続いて、テレマンの「12の幻想曲」より第10番。短調のこの曲で、前の曲の余韻を感じながら、次につながる口直しならぬ「耳直し」になればと思っている。

演奏会も終盤に近づいてきたところで、武満徹の「マスク」をお聴きいただく。テレマンが「動」なら、この曲は全曲通して「静」である。曲名のマスクは「能の女面」から来ており、能の静の中の「動」、静の中の「静」を表現したいと考えている。

ここで、当初発表のプログラムにはない、オトテールの「組曲 口短調」からの抜粋を披露したい。個人的にすごく好きな曲で、今日は「序曲」、「アルマンド」、「ロンド（緩）」、「ジーク」を演奏する。

そして最後は、ムチンスキの「二重奏曲」。小さな6楽章からなるこの作品は「静・動・静・動・静・動」という構成になっており、皮肉混じりのメロディやリズムが随所に現れる。寿司の「おまかせ」でいうと、最後の「卵焼き」のような曲である（笑）。さっぱりとした心持ちで家路についていただきたい。